鹿屋駅前に集結した「国鉄ローカル線存続鹿屋市期成同盟会」のメンバー

大隅線の存続を願って

誕生の喜びも束の間、大隅線は大きな岐路に立たされます。昭和54年1月。国鉄の赤字の大きな原因であるローカル線のあり方を検討していた「運輸政策審議会」が出した報告の中で、廃止してバス路線などに転換すべきとした路線に大隅線が含まれたのです。廃線を免れるには1日に路線1㎞あたり2，000人以上の輸送密度が必要でしたが、自動車の普及などによる鉄道の利用者離れが進んだ結果、大隅線の輸送密度は、昭和54年の時点で既に1，000人程度まで落ち込んでいました。

昭和55年12月には、国鉄の経営改善を促進するため、執るべき特別措置を定めた法律が制定され、いよいよ廃線が現実的なものとして認識されるようになりました。

一方で、赤字路線とはいえ地元の意向を聞かずに進められた廃線の話に、地元の国会議員や県、市、民間団体などが反発。廃止反対運動を展開するため、昭和56年11月、「国鉄ローカル線存続鹿屋市期成同盟会」を発足しました。活動方針として、大隅線の利用者減少に歯止めをかけ、可能な限り乗車実践運動を展開すること、廃止基準の輸送密度2，000人を達成し維持すること、チラシの配布、横断幕、懸垂幕の設置等の取り組みを行うことなどを決定しました。

当時行われた利用促進のユニークなイベントに「カラオケ列車」があります。これは廃線の対象となった大隅線と志布志線の沿線3市6町の婦人会、老人会から約120人が参加して行われたもので、隼人から宮崎県の日南までの往復の列車の中で、カラオケ大会を開催するというものでした。

このほかにも鉄道の旅と下車した駅周辺でのウォーキングを同時に楽しむイベントなど、鉄道を利用した様々な取り組みが企画されましたが、利用者増にはつながらず、昭和62年3月14日、全線開通からわずか15年で、大隅線は惜しまれながらその役目を終えたのです。

利用促進のためのイベント「カラオケ列車」

船間　オミヨさん（89歳）古江町

鉄道とともに生きた40年

戦時中の混乱期から大隅線廃線までの約40年間、鉄道とともに生きた女性が古江町にいらっしゃいます。船間オミヨさん（89歳）は、戦時中は国鉄職員として、戦後は魚を売る行商として鉄道を利用していました。

「私は昭和2年に古江で生まれ、16歳で中国の満州に渡り電話交換手として働いた後、18歳の時に古江に帰ってきました。帰郷後すぐに、経験を買われて志布志駅の電話交換手として働くこととなり、その後実家の近くへの配置転換をお願いして、古江駅での仕事に就きました。

当時は男性がほとんど戦地に行っていたので、古江駅で働く6人のうち5人が女性でした。私は改札の仕事をしながら、車両の連結や線路の切り替え作業などもこなしていました。

そんなある日、古江駅を米軍の空襲が襲います。空き時間に裁縫をしていたところ、一緒に働いていた機関士が『米軍機が来たぞ』と叫びました。その人は、しょっちゅう冗談を言う人だったので、また冗談だと思って知らんぷりをしていたところ、本当に米軍機が襲来し機銃掃射が始まりました。

私は命からがら古江小学校の裏手の防空壕に逃げこみ、なんとか助かりましたが、機関士は太ももを撃たれ、足を引きずりながら、やっとのことで防空壕までたどり着きました。次の瞬間古江駅は爆撃を受け、停車していた車両とともに大破しました。数日後駅に行ってみると、縫いかけの「もんぺ」を銃弾が貫いていました。本当に怖い体験でした。

終戦後まもなく、漁師をしていた夫と結婚。夫は八手網（はちだあみ）という大きな網で漁をしていたので、採れた大量の魚を古江だけでは売りさばくことができず、私が鉄道に乗って高山町（現肝付町）まで行き、行商として魚を売り歩くことになりました。

行商の仕事は大変な力仕事で、魚を金属製の缶に入れ、天秤棒（てんびんぼう）の前後にぶら下げて歩きます。重さは30㎏ほどあり、子どもが小さいうちは、さらに子どもを背中におぶって高山まで行っていました。天秤棒が頭にぶつかって子どもが泣き出すことも多く、魚が売れないときなどは、一緒になって泣いていた思い出があります。

魚を入れる金属製の缶。魚を入れていない状態でもずっしりと重く、当時の苦労は計り知れない

私が行商を始めた昭和20年代は100人以上同業者がいたと思います。みんな顔なじみや得意先のところに売りに行くわけですが、他の人に得意先を奪われないために、朝6時過ぎに出る一番列車に乗車して、高山駅に着くと急いで天秤棒を担ぎ、我先にと走って向かっていました。

廃線間近になると、列車は乗客が減り空席が目立つようになっていました。行商も少なくなり、10人ほどまで減っていました。そして昭和62年には遂に廃線。鉄道が無くなって寂しいという思いと同時に、これからどうやって魚を売ろうかという不安がこみ上げてきました。何度かトラックに乗せてもらって高山まで行ってみましたが、乗り継ぎや荷物の上げ下ろしなど不便なことも多く、廃線後しばらくして行商の仕事はやめてしまいました。

廃線から30年経った今でも、地域で会などがあるときは古江駅跡に集まります。駅の跡を見て思い出すのは、古江がにぎわっていた昔のこと。苦労も多く決して楽しいことばかりではありませんでしたが、駅には私の大切な思い出がたくさん詰まっています。」